

第1章

天満あたりから歩き始める



天満「但馬屋」前(2015年10月撮影)

生まれ育った東京を離れ、私が大阪へ引っ越してきたのは2014年の夏のことだった。東京にいたころはIT広告関連の会社に勤めていて、上司に怒られたり呆あきれられたりしてばかりの平社員として、それでもなんとか会社にしがみつくように生活していた。しかし、30代半ばとなってくると、会社から求められるものも徐々に大きくなっていく。マニュアルを作成して業務の効率化に取り組んだり、グループ長として後輩たちを束ねたり……。会社勤めをしていく以上、どれも当然の課題なのかもしれないが、私にとっては苦手なことばかりで、まったくうまくいかない。上司に叱られるのはすっかり慣れていたが、入社してきたばかりの新人たちから「はーん、この人、さては無能だな？」とすぐに見抜かれ、白い目で見られるのは精神的にこたえるものがあった。

仕事や会社に愛着を持つこともできていなかったし、10年先に自分が同じ場所でイキイキと働いている姿もまったくイメージできなかった。技術の進歩や流行の移り変わりによって激しく変化していくIT業界のことだし、会社の人員削減リストに載せられないとも限らない。

そんなふうに、今後の仕事に対して漠然とした不安を抱き続けている日々だった。そこに持ち上がったのが、生活の拠点を大阪に移そうかという話だ。私の妻は大阪出身なのだ。高齢になった義母が実家の稼業の後継者を求めているという。ちょうど我が家に子どもが生まれたタイミングでもあった。

妻にとつてみれば、明らかに将来性に乏しい夫の仕事に一家の命運を預けるより、自分がとりあえず安定した職を手にして大阪の実家近くで生活していく方が確実に思えたのだろう。こういうとき、「そこまで考えさせてしまつてごめん！俺、もつと頑張るよ」とか「キャリアアップして転職も視野に入れていくようにする！」などと考える人もいるのだらうけど、私は「なるほど、そっちの方が食いつぶされる心配が減るね。それがいいかも！」とすぐに賛成した。

もちろん、住み慣れた東京を離れるのは簡単なことではなかったが、馴染みのない場所
で新しい生活を始めるというのも刺激的でいいじゃないか。また、転居を機に、これまで
副業として小遣い稼ぎ程度に続けてきたライター業に本腰を入れてみたいという気持ちも
あった。

初めて見る「生活者のための大阪」

そうして引越してくる少し前に、改めて大阪を訪れた。妻の実家に挨拶に行きがてら、近所を散策した。「『天神橋筋商店街』^{てんじんばしすじ}という長いアーケード街があるから見てきたらどうか」と教えられ、そこまで歩いてみることにした。

「天神橋筋商店街」は大阪市北区の天神橋一丁目から七丁目までを貫いて伸びていて、「日本一長い商店街」が謳い^{うた}文句になっている。ちなみに、大阪の北側の中心地である梅田からもほど近く、JR大阪駅から大阪環状線という電車に乗って一駅の距離だ。

地下鉄の天神橋筋六丁目駅があるあたり、通称「天六」^{てんろく}から商店街に入っていくと、通りの両側からせり出すかのような迫力で、たこ焼き屋、洋品店、100円ショップ、寿司^{すし}屋、雑貨屋、ドラッグストアなどなどの店舗が立ち並んでいて、その間を大勢の人が行き交っている。それまでの自分にとって、大阪のイメージといえば、学生時代に旅行に来て歩いた道頓堀^{どうとんぼり}とか新世界など、これぞ大阪というような観光地として有名なところばかりで、歩いているのもほとんどが観光客のように見えたけど、ここは違う。おじさんおばさ



賑わう「天神橋筋商店街」(2014年10月撮影)

ん、おじいさんおばあさん、スーツ姿の人、ベビーカーを押す人、若いカップル、学生グループ、さまざまな年齢層の人たちがそれぞれの目的を持ってやってきている様子だ。

もちろん私のように、有名な天神橋筋商店街とやらを歩いてみようとしてきた人や、好きなお店があつて遠くから足を運んでいる人もいるのだろうけど、近くに住まいや職場や学校があつたりする人々が生活空間として利用している印象である。

数年暮らした今となつては、天神橋筋商店街はまだまだよそいきな表情を持った方で、大阪には他にもっともっと生活感にあ

ふれた商店街がたくさんあると知ったが、そのときの私には、天神橋筋商店街の喧騒けんそうは、初めて見る「生活者のための大阪」として映った。

少し歩くとJ R天満てんま駅付近にさしかかり、そこからグッと道幅が広くなる。このあたりは天神橋筋商店街の中でも一番活気のあるエリアで、前述のとおり、年齢も性別も目的もさまざまな人たちが集まっているためか、テレビ番組のロケ隊を頻繁に見かける。大阪らしいコテコテな雰囲気にかすたければおぼちゃんにカメラを向け、景気の動向について聞きたければビジネスマン風の男性にマイクを差し出し、と、どんな取材テーマにも対応できて便利なスポットなのだろう。

天神橋筋商店街をそのまま歩き、菅原すがわらのみちざね道真まことを祀る「大阪天満宮」に賽銭さいせんを投げに行くのもいいのだが、私はたいていこのJ R天満駅周辺の路地に吸い込まれていく。特に駅の北側から天満市場のある商業施設「ぷららてんま」周辺にかけての路地の入り組み方とそこに飲食店がひしめく様子は、雑多でエネルギーッシュで、私の胸を高鳴らせるものがあり、初めて足を踏み入れたときには強い衝撃を受けた。

朝9時から営業する酒場「但馬屋たじまや」では、大量に余ってしまったキムチを天ぷらにして

みたところから生まれた「キムチ天」をつまみに瓶ビールが飲める。老舗しにせのお好み焼き店「風月」の目の前には、おばあちゃんが店先の鉄板でたこ焼きを焼く店がある。市場で働く人々向けに午前2時から昼の11時まで営業している大衆食堂「ひろや」は、夕方から「裏ヒロヤ」と名を変え、行列のできる絶品イタリアンバルとなる。市場の北側には庶民的な価格の飲食店が軒をつらね、ビニールシートを軒先に張り出して営業するスタイルの店舗が多いために「ビニール通り」と呼ばれている。

キヨロキヨロと視線を動かしながら歩くだけで鳥肌が立つほど興奮してくる、迷路のような町並み。江戸時代から大阪有数の遊興地として賑にぎわったのが第二次大戦時の空襲によって焦土と化し、戦後の闇市から復興していったというエリアゆえ、複雑な構造が形づくられていったのだろう。こんなに魅力的な町並みがあるのか……この町の近くでなら楽しく暮らしていけそうだとそう思った。

そうして天満の隣町に暮らすことになった私は、たまに東京から友人が遊びに来ると、まず必ずといっていいほど天満を案内するようになった。自分が初めて触れた大阪の生々しい迫力を友人たちにも味わって欲しいのだ。その都度、案内する私自身に新しい発見を

もたらしてくれるような、尽きない魅力がこの町にはある。

ビニールシートの向かいには

しかし、その天満から足が遠のく日々が続いた。新型コロナウイルス感染症が猛威をふるい、2020年3月初旬に大阪市内のライブハウスで行われたライブ参加者に多数の感染者が確認されたという報道があった。その後も感染の勢いは収まらず、3月19日には大阪府から「三連休、兵庫県との不要不急の往来を自粛せよ」との要請が出された。4月16日には大阪にも緊急事態宣言が発令され、それに先立つ4月14日には、大阪府が府内の映画館やパチンコ店などの施設に向けた休業要請を出した。飲食店の休業までは要請されなかったが、営業時間は午後8時までと制限されることになった。「ステイホーム」が叫ばれていたころでもあり、私自身、ほとんどの時間を自宅で過ごした。

家の近くを「大川^{おおかわ}」という川が流れている。氾濫を繰り返していた淀川^{よじがわ}が明治時代に行われた大規模な改良工事によって現在の位置を流れるようになるまで、この大川が淀川の本流だった。そのため「旧淀川」と呼ばれることもある。近所のスーパーまで食糧の買い



以前より人の少ない JR 天満駅周辺の往来（2020年8月撮影）



コロナ禍の「但馬屋」（2020年7月撮影）

出しに行った帰り道、いつも私は大川の川べりまで行き、そこから対岸の天満方向を眺めては、あの入り組んだ路地の店々はどうなっていることだろうかと思いを馳^はせた。川を越えて少し歩けばすぐたどり着ける町が、すごく遠くなってしまったように感じた。

ようやく天満の様子をしっかりと見に行くことができたのは、緊急事態宣言の解除後、感染者数の増加に歯止めがかかったように見え、世間に自粛解禁ムードが漂い始めた2020年6月上旬のことだった。いつもなら大川沿いを散策して家に帰るところを、そのまま足を延ばして天満まで歩いてみた。そこに廃墟^{はいきよ}のような町並みが広がってはいはしまいかと、おそろおそろ覗^{のぞ}き見るような気持ちだった。しかし、そんな不穏なイメージを一瞬で吹き飛ばすかのように、そこにはこれまでと同じく、活気ある天満の町があった。

「こんなにも普通でいいんだろうか」と、むしろ心配になったほどである。いつも行く但馬屋の前を通りかかると、ビニールシートを天井から吊^つるし、テーブル席の間に仕切りを設けて営業している。コロナ以前と異なっているのはその点だけで、ビニールシートの向こうには酔客たちの背中が見える。それを見て、どんな状況であれ、人の営みはこのようにして続いていくのではないかと、そんなことを思った。

私は今また再び、この天満から歩き出し、コロナ禍によって変貌を遂げた大阪と、それをどこ吹く風と平然と押しつけていく人々の力強さと、その両方を確かめてみたいと思った。